

「すぐやる人」と「やらない人」の習慣という本からです
すぐやる人は非常識に考え、やれない人は常識に縛られる。

『Stay hungry, stay foolish.』

あまりにも有名な言葉ではありますが、これはスティーブ・ジョブズが 2005 年 6 月、スタンフォード大学の卒業式辞で語ったスピーチの締めくくりの言葉です。「Stay hungry」は、現状に満足して歩みを止めることなく、よりよい未来を渴望し、食欲でいる、ということ。そして、「Stay foolish」は、常識に捉われることなくバカでいる、ということなのですが、それは自分の心に素直に、そして探求心を失うな、ということだと思います。「すぐやる人」は探求心という内から湧いてくる行動基準を大切にしています。常識に捉われません。そういう意味では非常識なのかもしれません。もちろん、人としての礼儀やマナーは大切にしますが、発想が非常識でも、それは無限の可能性を否定しません。「やれない人」は常識に捉われすぎてしまって、「やってはいけない」という制約でがんじがらめになってしまいがちです。常識という言葉は非常に便利なもので、「それが常識だから」というひと言でたくさんのものが片付いてしまいます。人は拠り所を求める傾向があるので、常識という拠り所に依存します。しかし、一方で、本質から目をそらしてしまっているわけです。

ケンブリッジ大学大学院に入学すると、研究をより良いものにするために、クリティカルシンキングの授業が徹底されていました。つまり、様々な題材を使いながら主観や常識に捉われないように訓練されます。常識を疑うことは、自分の見ている景色、考え方や行動をいつもクリティカルな視点から捉えることです。「本当にそうなのか」を考えるとということでした。以前、オックスフォード大学の副総長で、行動脳科学を研究されているニック・ローリンズ教授と大阪で食事をご一緒させていただく機会がありました。オックスフォード大学には、天井から花を逆さに吊るしてあるところがあります。それは、「常識に捉われることなく、自由に考えよう」という、学生へのメッセージだそうです。そして、ローリンズ教授は fascination という言葉を何度も繰り返されていたのですが、それはつまり、「夢中になれるものを持っているか」ということこそが行動力の源泉であるということでした。当たり前だとか、常識だとかといった、なんとなく決められたルールに沿って生きるのではなく、あなたが本当にしたいことをするためにはどうすればいいかを、ゼロベースで考えてみようということなのです。

子供の頃、無邪気にはしゃいだはずですが、しかし、「おとなしくしなさい。いつまでも子供じゃないんだから」と先生や親から言われ続けた結果、「はしゃいだりするのは子供のすることだ」と思い込んでしまって、常識や世間体を気にするようになったという人も少なからずいるはずです。歴史は「現在の非常識」が「未来の常識」になってきたことの積み重ねでしょう。ましてや、これだけ時代の変化が早く、次から次へと新しいものが生まれてくるということが、それを証明しています。そして「すぐやる人」たちはワクワクする心を失わず、それを実現するために必要なことの本質を考える習慣を身につけているのです。「どんな洗練された大人の中にも、外に出たくてしょうがない小さな子供がいる」と言ったのはウォルト・ディズニーです。あなたの中にも小さな子供が眠っているはずです。もちろん、その小さな子供をいきなり全開することは難しいかもしれませんが、いつもの自分の考え方、周りの考え方を「本当にそうなのかな」と考えてみる習慣をつけてみたいものです。

ウォルト・ディズニーは何と言いましたか？

()